

プロジェクト・チーム部 活動報告

(プロジェクト・チーム部長
石川 賢司)

今年度は、いままでの研究を見直し、どのようにプロジェクトを進めていくかを検討した。

過去の研究テーマを振り返ると、平成19年度は「これからの英語教育の方向性」とし、選択教科の英語授業についてアンケートをとり、検証した。平成20年度は「音読からスピーキングへの指導」という具体的なテーマを設定し、音読指導の方法について教育の工夫があり、さまざまな研究がなされているが、スピーキングの指導として、スピーチの指導は広がりが見られるが、生徒自ら発話する、あるいはやりとりをする、しかもImpromptuな発話を含む、といった会話活動はなかなか指導が難しく、指導のプロセスが見えにくい。音読とスピーキングの間には何があるのか、何が必要なのかを探り、指導のプロセスを明らかにし、具体的に教室で使える指導方法を研究した。

今年度は、学習指導要領の移行措置を踏まえ、平成21年度は「小学校英語活動と中学校の英語指導について」をテーマとし、小学校での英語活動がどのように児童に影響を与え、表現活動としての英語をとらえているのか。また、中学校の授業で小学校の英語活動がどのように影響をし、生徒の意欲・関心に作用しているのかを検証した。

一方、日本の英語教育だけでなく、海外の初期英語教育はどのように行われているのかという視点でオーストラリアの小学校

でのイマージョンプログラムについて、立教大学の先生を講師として招いて講演をしていただいた。

イマージョン教育は、言語学習を中心としている教育方法とは違い、言語以外の科目のカリキュラムを第二言語で教える。授業時間の50%以上は目標言語で行う。イマージョン教育の良い点は、①言葉の能力を高める。②メタ認知能力を高める。③知識能力を高める。④第一言語能力を高める。⑤他人への思いやりと協力の心を養う。⑥個人の学習に対する責任の向上となる。⑦自分に自信をもつことができる。などわかりやすい講演であった。

現在、日本でもいろいろな学校でイマージョン教育の取り組みが徐々に行われている。その中には、授業方法やカリキュラム編成など移行措置に対応するヒントがたくさんある。今後、各学校で授業方法の改善や小学校英語活動と中学校英語授業の連携についても多くの示唆を含んでいた。

将来の英語教育を考えた時、わたしたち英語教師は、世界の動きや社会の流れを常に意識し、時代に合う教育をしていかなければならない。学校現場は数々の事務処理や生活指導に追われ、十分な研修の時間や研究を深めていく場所がないのが現状である。プロジェクト・チーム部は、地道に研究を深めていくような長期的な展望をもちさまざまな課題を正面からとらえていく。